

F級テイマーは

数の暴力で

2

世界を
裏から

支配する

ゆーき
yu-ki

Illust. さかなへん

登場人物 紹介



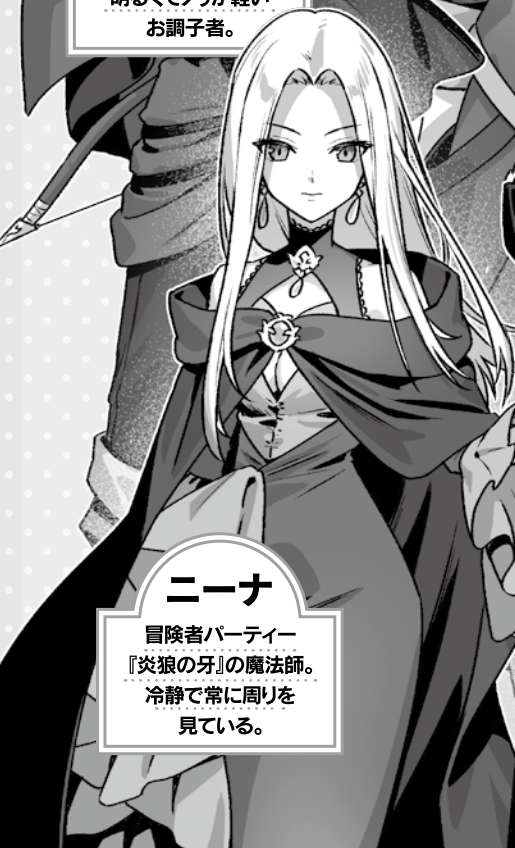
アルト

冒険者パーティー
『炎狼の牙』の弓術師。
明るくてリガが軽い
お調子者。



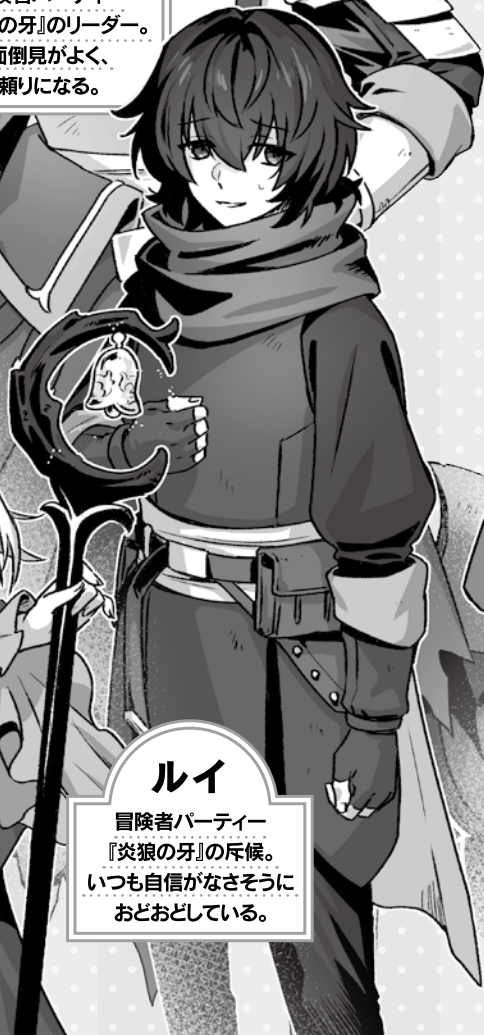
ゲイリック

冒険者パーティー
『炎狼の牙』のリーダー。
面倒見がよく、
頼りになる。



ニーナ

冒険者パーティー
『炎狼の牙』の魔法師。
冷静で常に周りを見ている。



ルイ

冒険者パーティー
『炎狼の牙』の斥候。
いつも自信がなさそうに
おどおどしている。



レイン

グラシア王国の王太子。
人格、実力ともに
王の器に相応しく、
多くの人に慕われている。



シン

本作の主人公。
最低級位のF級《タイム》を
授かったせいで、侯爵家から
追放されてしまう。

ネム

シンが初めて
仲間にしたスライム。
シンが他のスライムを構うと
ヤキモチを焼く。

第一章 念願のダンジョンに挑戦！

俺——遠藤和也は、漫画やアニメが大好きな極々普通の高校生だった。

だがある時、車に轢かれてあっさりと逝ってしまった……かと思えば、剣と魔法のファンタジーな世界に、侯爵家の長男として転生していったんだ。

シンという新しい名を得た俺は、五歳になった時に神様から祝福という特殊な能力を授かったんだけど……それがまさかの最低級位、F級の《タイム》だった。

最弱の魔物、スライムを従える程度のことしかできず、さらに魔力容量と魔力回路強度という魔法の根源となる才能も人並みだった俺は虐げられ、侯爵家から追放されてしまった。

ただ、俺の《タイム》はスライムしか仲間にできないけど、大量に従えることができたり、遠隔で指示を出せたり、視覚の共有ができたり、他にも色々できることがあって、結構使えるんだ。

そして、祝福を鍛え、魔法を鍛え、剣術を鍛え——色々頑張った結果、案外強くなれたんだよね。その力で俺は冒険者となり、自由に生きることを決めた。

冒険者を助けたり、陰ながら街を救ったり——そして俺を追放した侯爵、ガリアの不正を暴いて元家族のフィーレル一家を没落させたりと、まあ短い間で色々なことをしたよ。

そして今の俺はというと、街をのんびりと歩いている——

「はー、平和だなあ……」

ファイレル一家が王都から派遣された騎士によって連行されてから、今日で一週間が経過した。あれによって何か変わったなんてことはなく、俺はいつも通り冒険者活動に勤しんでいる。うん。実に平和だ。

そんなことを思いながら歩いていたら、冒険者ギルドに到着した。

今日来た理由は依頼を受けるため——ではなく、冒険者ランクをDランクに上げてもらうため。これは一週間前、ギルドマスターのジニアスさんに約束してもらったんだよね。

いやー、楽しみだ。

何せ、Dランク冒険者になったらダンジョンに入れるようになるんだよ。

ここ一週間、ダンジョン攻略に向けて、頑張ってポーションを集めたなあ……

「んー、変わらないね」

扉を開け、中に入った俺は、雑多な光景の前に、思わずそう口にした。

入った直後は、冒険者たちから視線を浴びたが、すぐに興味を失ったようにその視線は逸らされる。

一週間前、まだ最低のFランク冒険者であった俺は、ジニアスさんに直々に呼び出され、Fランクから一つ上のEランクに上げてもらった。一気にランクが上がると不自然ということで、EランクからDランクには、少しか期間を空けて上げるようになった。

当時Fランク冒険者だった俺が、ギルドマスターであるジニアスさんに呼び出されたことは、そ

こそ話題になってしまった。

でも大人しくしていれば、すぐに新しい話題によって俺への興味は消えていく。

ありがたいことだ。

その後、受付の列に並び、待つこと数分。

自分の番になった俺は、笑顔を見せる受付の女性に用件を伝える。

「ランクアップの件で来たんだけど……」

俺は銅色の冒険者カードを取り出すと、女性に手渡した。

それを女性はニコリと笑って受け取り、どこからともなく取り出した書類の確認を始める。

「……はい。問題ないですね。ギルドマスターから話も伺っていますし、これよりシンさんはDランクに昇格です。では、冒険者カードの更新をしますので、少々お待ちください」

そう言って、女性は俺の冒険者カードを持って、受付の奥へと行ってしまった。

「……やー、Dランクかあ……」

女性に「Dランクに昇格です」と告げられたことで、ようやく昇格を実感できた俺は、拳を握りしめながら、喜びに打ち震える。

最初は、目立ちたくないからってランクアップの速度は程々にしようと思っていたんだけどなあ……

でもまあ、短期間で昇格した前例も多いから、これくらいなら大丈夫だろう。

また何かして、Cランクに上がるとかだと流石にマズそうだから……それはなんとしても阻止す

るとしよう。

Cランクになるのは、最低でもあと二年は先にしよう。なんせ、俺はまだ九歳なんだから。そうして考え事をしながら、待つこと三分。

女性が受付に戻ってきた。

「お待たせしました。こちらが新しい冒険者カードになります」

そうやって女性が差し出したのは銅色——ではなく、銀色のカード。

そこには俺の冒険者ランクであるDと、名前のシンの文字が刻まれていた。

ああ、そういやDランクになると、カードの色が銀色になるんだったな。

ちなみに、Aランクになると金色、Sランクになると黒色になる。

「ありがとう」

札を言っつて、新しくなった冒険者カードを受け取った俺は、それをすぐにポケットの中にしまう。

「あと、ギルドマスターからこちらを……」

訝しげな表情をしながらそう言っつて、そつと女性が差し出したのは、一通の手紙だった。

なかなか上質な紙の封筒で、お偉いさんが書いたということが一目見て分かる。

「これは……？」

手紙を受け取った俺は、眉を顰めながら思わずそう問いかける。

だが、女性もよく分かっつていないようで、「ちゃんと読んでおけとだけ聞いております……」と

答えるだけだった。

内容の予想はつかないが、あとで確認しておけばいいだろう。

「分かったよ。それじゃあ」

用件を済ませた俺は、そう言っつてすぐにその場を離れた。

そして、そのまま冒険者ギルドの外に出る。

「……さてと。次は、鍛冶師のガヌスさんのところへ装備を取りに行かないと」

装備の制作を依頼してから三週間が経過したため、そろそろ完成していることだろう。

金も十分な額を用意しているので、早速受け取りに行くか。

と、その前に……

「ちよつと手紙の内容気になるし、先に見ておくか」

もし急ぎの用事だった場合は、今後の予定を変えなくてはならない可能性だつて出てくるわけだ

し。そう思いながら、人のいない路地裏に移動した俺は、壁に寄りかかるとそつと封を剥がした。

そして、中から一枚の手紙を取り出すと、内容に目を通す。

「ほうほうほう……は、そーゆーことね」

手紙を一通り読んだ俺は、深く息を吐いた。

何を隠そう、この手紙の送り主は——ここグラシア王国の王太子、レイン殿下なのだ。

「いや、なるほど。確かに、手紙が来てもおかしくはないよなあ……」

俺がガリアの不正を暴いた時にレイン殿下はいずれコンタクトを取るつて言っつたし、考えてみ

れば普通に予想が付くことだったな。

それで、肝心の内容は――

「二十日後に迎えを送るから、分かりやすい場所にてほしい……か」
要約すると、そんな感じだ。

そして、そのあと俺は転移で王都へ送られ、色々と話す……って流れらしい。

王太子が街のそこら辺にいたら、騒ぎになるからね。

王侯貴族としてはよくあるやつだ。

「二十日後なら、ダンジョン探索をする予定を変更しなくてもよさそうだな」

ダンジョン探索は俺とスライムたちだけで行う都合上、物資的な問題で一度にそう長くは潜れない。予定では、四泊五日の探索を何度か行い、慣れてきたらもう少し伸ばす……といった感じだ。

その合間に、レイン殿下と会う予定が入っただけのこと。

「さてと。見るもの見たし、ガヌスさんのところへ行かないと」

手紙を再び封筒の中に戻し、リュックサックの中に入れた俺は、今度こそガヌスさんのところへ向かって歩き出すのであった。



王城の自室で、私――レインは紅茶と菓子を楽しんでいた。

室内は静寂に包まれており――とても落ち着く。

祝福によって、人並み外れた感知能力を持つ私は、その弊害として、人の多い騒がしい場所が苦手だ。だが、王太子故にそういつた我儘は言えない。

だからせめて今だけは、この短い静寂を思う存分楽しむとしよう。

「……レイン殿下。シュレインのギルドマスター、ジニアス殿へ無事手紙が届きました」

どうやらあの子――シンに宛てた手紙がジニアス殿に届いたようだ。

私は引き続き紅茶を嗜みながら、側に控える男――ファルスに視線を向ける。

「ファルス、ありがとつ。君も席に座ってお茶でも飲んでくれ。それと、その堅苦しい口調もやめてくれ」

そして、限られた人しか見せない親しい態度で、私は席を勧めた。

その誘いに、彼は「そうだな」と息を吐くと、丸テーブルを挟んで私と向かい合うように腰を下ろす。

そんな彼の肩には、従魔である鳥型の魔物――ファントムバードのミルスがいた。

「はい、どうぞ」

私は紅茶を注ぐと、彼に差し出す。

「やれやれ。毎度のことながら、王太子様に紅茶を淹れてもらうとは、俺は贅沢者だな」

ファルスは肩を竦めながら冗談っぽく言って、早速紅茶に口をつける。

「ははは、やめてくれよ」

そんな彼の言葉に、私は苦笑いを返した。

ファルス——ファルス・フォン・ジークニス伯爵^{はくしやくしそく}子息とは、学園に入る前から付き合ひがあり、彼は今、私の護衛を務めている。

そんな彼の祝福^{ギフト}はA級の《タイム》。

今思えば、身近にファルスのような凄腕のタイマーがいたからこそ、逆にシンの祝福^{ギフト}が《タイム》だと、シンが実際に使役するスライムを見るまで気がつかなかったのだろう。

「さて、とりあえず話を聞きたいわけだが……まとめるとどんな感じだった？」

「そうだな。ジニアス殿によると、あの化物じみた潜入^{せんに入ろうほうのうりやく}諜報能力だけではなく、戦闘能力も相当高いらしい。詳しくは本人に聞けと言われたがな」

「なるほど、ね。やはり戦闘能力も高いか」

元Sランク冒険者であるジニアス殿が強いというのだから、生半可な実力者……というわけでもないだろう。

すると、ファルスが口を開いた。

「それで、レイン殿下はシンをどうするつもりなんだ？ 配下にするのか？」

ファルスのもっともな問いに、私は首を横に振った。

「いや、私との関係性をどうするかは、彼に一任するつもりだ。勿論^{もちろん}、こちらから希望は出すけれど」

「へー、そこまで相手に譲るのか。知られたら多方面から文句言われるぞ」

「だからこそ、ファルスにしか話していないんだよ。あの子は、自由に生きることが好む、生粋の

冒険者^{ぼうけんしや}気質^{きしつ}のように思えたからね。権力で何かを強制しようものなら……最悪国の機密情報全部引っこ抜かれて、他国にバラ撒かれるよ？」

ガリアをあそこまで追い詰めたあの子なら、それぐらいなんの躊躇^{ためら}いもなくするだろう。

だが、それを好んでやるような質^{たち}でないことも、分かる。

「……会う日が、楽しみだ」

私は口角を小さく上げると、そう呟くのであった。



手紙を読み終えてから歩くこと十数分。

狭い路地裏を歩いた先に見えてきたのは、ガヌスさんが営む武器防具店だ。

武器防具店よりは、工房と言った方が正しいんじゃないかなあ……と思う店内に足を踏み入れた俺は、少し歩いたところでガヌスさんの名前を呼ぶ。

すると、奥から「待っておれ！」と野太い声が聞こえてきた。

数分待つと、奥から無精髭^{ぶししょうひげ}を生やした筋肉質なおじさん——ガヌスさんが出てきた。

「三週間経ったから、様子を来たんだけど……どんな感じかな？」

「おう！ バッチリだ。早速来てくれ」

俺の問いに、ガヌスさんは上機嫌に答えると、奥の工房へついてくるよう促す^{つな}がす。

そんなガヌスさんのあとに続いて、俺は店の奥へと向かった。

「おお……」

やがて見えてきたのは、鍛冶場だった。

熱い焔、硬質な鍛冶台。そこら中にある素材と装備。

これぞ鍛冶場って感じがするよ。

そうして俺がいかにもな光景を前に目を輝かせていると、いくつか装備を持ったガヌスさんがこちらに歩み寄ってきた。

「ほれ。これが今回頼まれた品だ。早速装備して、確認してほしい」

ガヌスさんはそう言っつて、台の上に装備を置く。

脛当て、籠手、普段使い用の剣の三つだ。

俺は早速手に取ると、それらを全て身に着けた。

「おお……いいね」

体を動かしながら、俺は新しい装備の付け心地を実感する。

注文通り、脛当てと籠手は軽めで、九歳児の俺でも動きやすい。

腰に付けた剣の長さもちょうどよく、鞘が動きの邪魔になるなんてこともない。

流石はこの街——シュレイン屈指の鍛冶師。いい仕事をする。

「ふむ。その様子なら、サイズは問題なさそうだな。あとは剣だ。ほれ、これを斬ってみろ」

そう言っつて、ガヌスさんが台の上に置いたのは、騎士が装着するような、フルフェイスの兜

だった。

「分かった」

内心、斬れるかなあ……と不安に思ったが、それを指摘するのは剣の性能を疑うことに他ならない。それは、鍛冶師に対する侮辱行為だ。

よし。やるからには本気でやろう。

そう心に決めた俺は、鞘から剣を引き抜いた。

すると、黒光りする刀身が露わとなる。

これは……魔鋼だな。

魔鋼は、《鍛冶》の祝福で魔力を込めながら、鋼を鍛えることによって作られる素材だ。

俺は剣を振り上げる。

そして、刀身に魔力を流すと、勢いよく振り下ろした。

ザン！

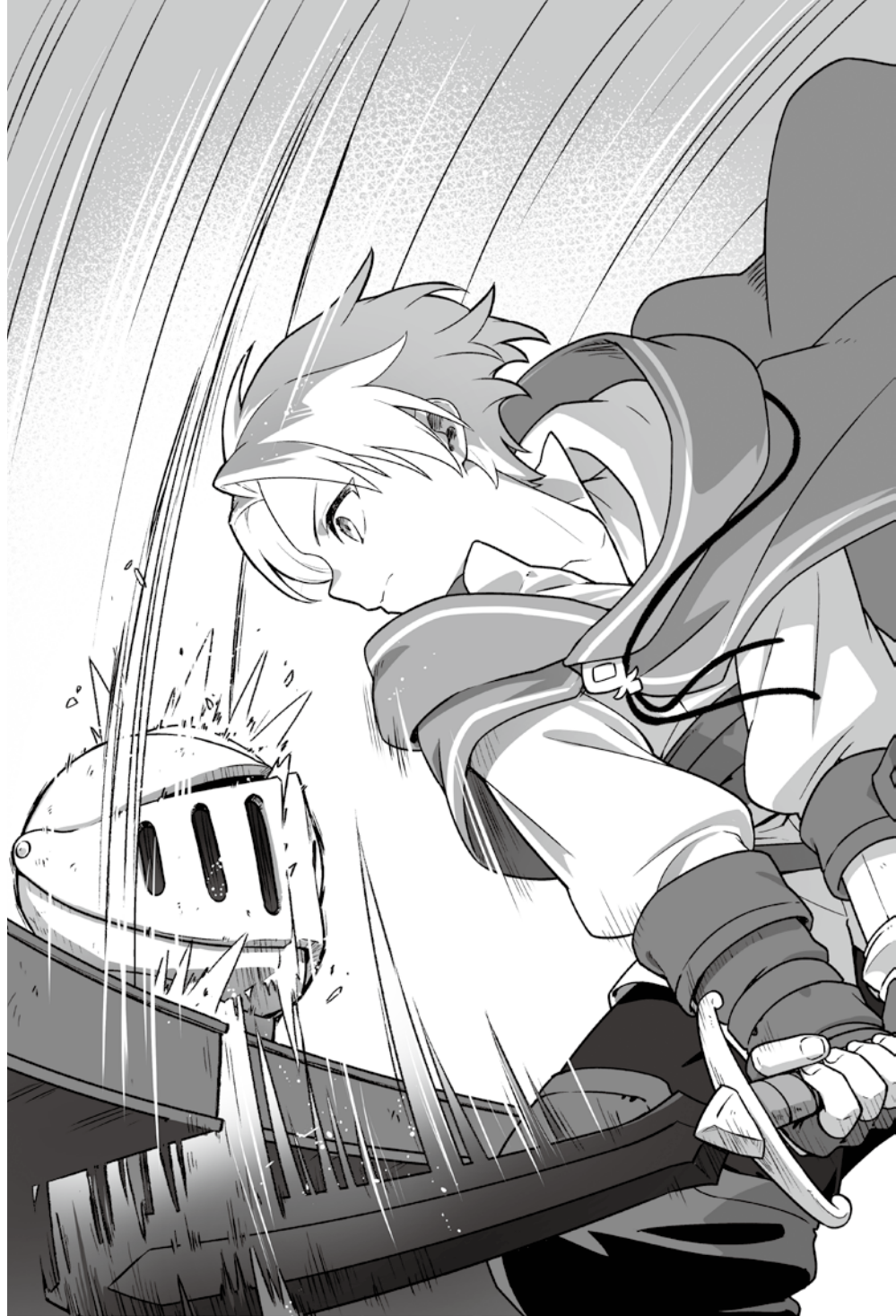
そんな綺麗な音が、工房内に響き渡った。

「すげえ……」

下まで剣を振り下ろした俺は、その体勢のまま、思わず感嘆の息を漏らす。

俺が既に持っている剣は、ミスリルという硬くて魔力をよく通す素材で作られており、素材そのものの稀少価値が高いので、勿論、ミスリル剣の方が性能はいい。

だが、魔鋼で、これほどの性能の剣を生み出すのは、素直に称賛だ。そんじよそこれらの鍛冶師



では、こうはいかないだろう。

そんなことを思っていると、ガヌスさんがいきなり声を上げて笑い出した。

「はっはっは！ 驚いたのはこっちの方だ。まさか台ごと斬っちゃうなんてな」
ん？ 台ごと斬る？

言っている意味が分からず、俺は不思議に思っ眉を顰めながら、ゆっくりと顔を上げた。

するとそこには、兜とそれを載せていた台が、綺麗に両断されている光景が広がっていたのだ。

「……うそん」

魔鋼製の剣なら、全力でやればちょうど兜が両断できるぐらいだろう……と、思っていたさっきの俺の頬を殴ってやりたい！

ちよ、この台いくらするんだろ……

弁償という二文字が頭をよぎり、すつと顔が青ざめる。

俺が戦々恐々とする中、ガヌスさんが口を開いた。

「あー、別に弁償はしなくていいぞ？ どうせその台は近いうちに買い替えるつもりだったしな。それに、これは俺がお前の腕を見誤っていたからこそ起きたんだ。お前に責任なんてものは微塵もねえよ。だから、そんなこの世の終わりみたいな顔すんな」

「あ、ありがとう……」

よかった。ガヌスさんが心優しい人だ。

今の状況で、弁償なんてできやしないからな……

最悪借金とかになってたかと思うと……うん。恐ろしい。

「にしても、いい劍の腕だな、お前さんは。その細腕であんな一撃が出せるとか、誰も予想できねえって。魔力操作の技量も、俺の比にならねえレベルだし」

「まあ、それは結構頑張ったから」

ポテンシャルがないのなら、並外れた練習量に裏打ちされた技量で補う。

それが、俺が強くなる上で導き出した一つの答えなのだ。

……《タイム》のポテンシャルに関しては、スライムしかタイムできなくて弱いと思ったら、視覚共有ができたリ、タイムできる数が大量だったり、チートな部分もあつてよく分からんけど。

「そうかそうか。んじゃ、話はこんぐらいにして、代金を払ってもらうぞ。代金は八万プルトぴったしだ」

おお、まさかこのクオリティで言った通りの代金になるとは思わなかったな。

俺が提示した予算内で、限りなく頑張ったというのが見て取れる。

ちなみにこの世界では、小銅貨一枚が一プルト。それ以降は、銅貨一枚が百プルト、小銀貨一枚が千プルト、銀貨一枚が一萬プルト、小金貨一枚が十萬プルト、金貨一枚が百萬プルト、白金貨一枚が一千万プルトとなっている。日本円にすると、大体一プルト＝一円ぐらいの感じだ。

「分かった。これを——」

俺はリュックサックの中から銀貨八枚を取り出すと、ガヌスさんに手渡す。

ガヌスさんはそれを軽く確認したあと、口を開いた。

「よし。毎度あり！ 今後メンテナンスとかが必要になったら、またうちに来いよ！ 格安で請け負^おってやる」

「ああ、ありがとう」

製作者にメンテナンスをしてもらった方が確実なので、格安でなくとも来るつもりであったが……安くしてくれるというのならありがたい。

まだ収入が安定しているとは言いがたいからな。

現に今金欠だし……

「おし。じゃあな！」

「ああ」

そうして新しい装備に身を包んだ俺は、ガヌスさんと別れると、次なる目的地——シュレイン北西にあるダンジョン管理所へと向かうのであった。

「……お、見えてきた見えてきた」

二十分ほど歩いたところで、俺は目的地のダンジョン管理所に着いた。

外装は、よくある商会の本店みたいな感じだ。

「よし。入るか」

ここには二か所の入り口があり、ダンジョン探索をしにきた人が入るのは西側の扉だ。

東側の扉は、ダンジョン内で採取されたものの取引に来た人が入る場所——商人と貴族が入る場

所だ。

俺は扉を開けて中に入る。

「えっと……あつちか」

入ると、そこには一つしかない酒場があった。ダンジョン探索を終えて帰ってきた冒険者たちでよく賑わっている。

そんな彼らを一瞥した俺は、右奥にある階段の方へと向かう。

階段の横には一人の男性職員がおり、俺がその階段の前まで来ると口を開いた。

「悪いけど、ここから先はDランク冒険者以上じゃないと入れないよ。しかも子供が一人で来るなんて……中に仲間がいるのか？」

やれやれといった様子で、男性職員は肩を竦める。

めっちゃ舐められているぞこれ……！

だが、それは俺の外見ゆえ、仕方のないことなのだ……

九歳の子供がダンジョンにいることは珍しい上、ぶっちゃけ一人で行くのはAランク以上の実力者か、ただのバカの二択なんだよね。

ダンジョン探索って基本一人じゃやらない。最低でも前衛後衛サポーターの三人は必要だ。

「Dランク冒険者だよ。信じられないなら、ジニアスさんに確認を取ってもらってもいい。あと、中に仲間がいるから安心してほしい。一人じゃない」

俺はポケットから冒険者カードを取り出すと、男性職員に見せつける。

中に仲間がいるというのは嘘だが、ここを通してもらうためには仕方ない。

「え、嘘!？」

男性職員は、目をあらんかぎりに見開いて驚くと、俺の冒険者カードをじつと確認する。

やがて、偽物でないことが分かったのか、バツが悪そうな感じで口を開く。

「わ、悪かったな。そのなりでDランク冒険者だとは思わなかった。通っていいぞ」

「ああ、通らせてもらうよ」

冒険者カードを返してもらった俺は、それをリュックサックの中にしまうと、地下へと続く螺旋階段を下り始めた。

「やー、もうじきダンジョンに入れる」

念願だったダンジョンに入れることに、俺は喜びの笑みを浮かべた。

そう。ダンジョンの入り口は、この階段を下り、更にそこから少し歩いた場所にある。

若干浮かれながら歩いていると、階段の両脇にある窪みの中に、様々なものが入っているのに気づいた。

「丸岩に矢、あとは設置型の罠か」

そこにあつたのは、様々な武器。

何故そんなものがここにあるのか。それは、魔物の大量発生などの異常事態が発生して、ダンジョンから溢れ出した時に、ここで防衛するためだ。

街の中で魔物が暴れたら、大惨事どころの話じゃ済まんからな。

そんなことを思いながら、長い螺旋階段を下り続け——ようやく辿り着いた。
「おー、賑やかだなあ」

魔道具によって明るさが確保されたその空間には、多くの冒険者がいた。
ダンジョンから帰ってきた人、これからダンジョンへ行く人が、溢れている。
ちよつと血腥いが……まあ、怪我人も多いからね。仕方ない。

あ、一応ここは魔法で換気されているから、息苦しいとかはないみたいだ。

「じゃ、早速行きますか」

準備は既に終えてある。

俺は冒険者たちの間をすり抜け、横にある受付を素通りする。

この受付は採取した素材を売る時に使い、ダンジョンに入る時は特に手続きはいらない。
そして、奥にあった、更に下へと続く階段の前に立つ。

ここを下れば、いよいよダンジョンの入り口に辿り着く。

よし。行こう！……と心の中で気合いを入れ、一歩前へと足を動かすと——

「ん？ おい、小僧！」

他の冒険者に止められてしまった。

他の冒険者に変に絡まれないように気配を消して、そろりと歩いていたのだが……見つかったか。

面倒なことにならないといいなあと思いつながら振り返ると、そこには背中に大きな斧を背負った、

巖つい雰囲気のおじさんがいた。

後ろには、こちらを見つめる仲間らしき人たちが立っている。

「あ……一応言っておくと、俺はDランクなんだ」

「ん？ 別にそれは疑っちゃいねえ。気配の消し方とか、足さばき見りやなんとなく分かる。だがそれでも、流石に一人で行くのは危ないぞ？」

俺がDランク冒険者であることは当然とばかりに信じてくれたが、代わりに至極全うな忠告をされた。

「第一階層を少し見てくるだけだよ。仲間からどんな雰囲気か見てこいって言われたんだ」

「それでも危ねえぞ。帰った方がいい」

ん、心配してくれるのは嬉しいんだけど、どうしてもお節介だと思ってしまう。

鍛錬を重ねまくった今の俺の剣技と魔法なら、第十階層ぐらいまでならスライムを大して使わずとも行けちゃうと思うんだよね。

それ以降になると、スライムを大量召喚しないといけなくなる可能性が少なからず出てくるけど……

ちなみにテイムしたスライムたちは、自身から半径五メートル以内の場所であれば、どこにいても好きな時に召喚することができる——それを有効活用すれば、割と戦えるんだ。
すると、そんな俺をじっと見つめていた男性が、深くため息を吐いて口を開く。

「そんなに行きたいなら、俺たちと一緒に来い。Dランクなら、足手まといにはならんだろう」

「……え？」

予想外の誘いに、俺は思わず呆けた声を出してしまった。

「一緒に、か……」

想定外の提案をされた俺は、目を見開く——が、すぐに冷静になると、思索する。

ん、これ以上食い下がったら、他の冒険者たちからも注目を浴びて、面倒なことになりそうだが、でもまあ、俺はあくまでもダンジョンの情報しか知らないわけだし、彼らについて行けば実際に何度も潜っているからこそ分かることとかが色々と知れそうだ。

ただ、捨て駒にされる可能性や、俺の物資狙いで途中で襲ってくる可能性も十分に考えられるため、警戒は十分にしておくしよう。

もともと、俺の目には彼は善人のように見えるけどね。

貴族の子供として生き、長く人の悪意を見てきたからこそ、そこら辺の能力は高いという自負がある……だから、俺の目は決して節穴ではない。

「……分かった。是非、同行させてほしい」

俺はそう言っただけの申し出に頷くのであった。

一方男性はそんな俺を見て、息を吐く。

「ああ、それでいい。てわけで……お前ら！ 今回だけ一人増えることになったぞ！」

彼は後ろで一部始終を見ていた仲間らしき人たちに向かって言う。

そんな彼を見て、男女三人はやれやれといった様子で口を開く。

「リーダーのことだから、子供をあのまま行かせるつもりはないとは思っていたが……」

「上に送り返すんじゃないかって、この子の気持ちを考えて、一緒に連れて行くのがリーダーらしいね」

「うん。激しく同意」

どうやらパーティーメンバーも、俺が同行することに否定的というわけではなさそうだ。

「はははっ。すまん。見捨てられなくてな。とりあえず、自己紹介をしておくか」

仲間たちの言葉を聞いて、俺に声をかけた男性は頭を掻きながらそう言うのと、再び俺の方に向き直る。

「『炎狼の牙』のリーダーをやっているBランク冒険者で、斧使いのゲイリックだ」

そう言っただけ、男性——ゲイリックさんはニッと笑みを浮かべる。

すると、そんなリーダーのあとに続いて、他三人もそれぞれ自己紹介をしていく。

「私はニーナ。Cランク冒険者で、無属性魔法師よ」

長い灰色の髪を持つ、ローブ姿の若い女性——ニーナさんは、やや硬めの口調で言う。

「俺はアルト。Cランク冒険者の弓術師だ。よろしく」

長身痩躯で茶髪の若い男性——アルトさんは、ニーナさんとは反対に軽い口調で言う。

「お、俺はルイ。Cランク冒険者で……斥候だよ」

ぼさっとした黒髪の若い男性——ルイさんは、若干挙動不審になりながらも言う。

そうして皆の自己紹介が終わったタイミングで、俺も自己紹介をすることにした。

「俺の名前はシン。Dランク冒険者の剣士だ」
そう言って、俺は軽く頭を下げる。

「よし。自己紹介も終わったことだし、最終確認をするか——」
「待って」

ゲイリックさんの言葉を遮ったニーナさん。

「この子って本当にDランクなの？ ちょっと冒険者カードを見せてよ」

ニーナさんは俺の前まで歩いてくると、そう言って冒険者カードの提示を求めてきた。

まあ、当然っちゃ当然の反応だよな。

「いいよ。ほら」

そう言って、俺はリュックサックから冒険者カードを取り出すと、ニーナさんの目の前に掲げた。
それを、ニーナさんは食い入るようにじっと見つめる。

「ん……本当みたいね。う、疑って悪かったわ。でも、迷惑かけたら承知しないわよ」

かなり疑っておいて、本当だと分かった途端、気まずそうにニーナさんは顔を背けた。

そして、忠告とばかりにそう言う。

『俺に迷惑をかけられることを恐れているんだったら、同行するつもりはないよ……』と、言おう
と思ったが、流石にそれは空気を読めてないなと思い、口を噤む。

「へー、結構上位の祝福をもらってるのかな？」

「うん。多分」

一歩下がったところから、様子を見ていたアルトさんとルイさんは、口を揃えてそう言った。

「まー、そういうわけで、ダンジョンに入れるランクだから、問題はないぞ。じゃ、脱線しちまっ
たが、最終確認だ」

こちらの会話が終わったタイミングで、ゲイリックさんが口を開く。

「とりあえず、ポーションはちゃんとあるな」

「うん。万が一の魔法石も準備してある」

「あ、食料も七日分。ちゃんとあるよ」

「こつちも、予備は十分あるわ」

ゲイリックさんの言葉を聞いて、皆それぞれ、手持ちのリュックサックの口を開いて、荷物の確
認をする。

魔法石とは、その名の通りある特定の魔法が封じ込められた石のことで、それを砕くと一度だけ
魔力を一切使わずに特定の魔法を行使できるというなかなかチートなアイテムだ。

俺はどうすればいいのかなーと思っていたら、そんな心を読んだかのようにゲイリックさんが口
を開いた。

「シン君。君のリュックサックの中身はどんな感じだ？」

「食料七日分、中級のポーションが三本、中級の魔力回復薬が四本、革袋六枚、その他諸々……」
言われた通り、俺はリュックサックの中身を伝える。

ちなみに、その他諸々はただの生活用品だ。荷物を置いとける場所がないから、こうやって持っ

てきている。

宿は一月間で取っているから、部屋に置いてもいいのだが……盗まれる可能性があるからね。

この世界は治安が悪い。まあ、日本がよすぎたついでというものもあるだろうが……

「なるほど。思ってたよりもあるな。あ、そういや聞くの忘れてたが、どんぐらい滞在できる？ それによって俺たちの予定も変えなきゃならんのだが……」

「食料が尽きる前に帰れば、いくらでも……だな」

ゲイリックさんの言葉に、俺はそう返す。

つまり、七日間は滞在できるよということだ。

「分かった。そりゃこちらとしても都合がいい。んじゃ、準備も終わったことだし、先へ行くぞ！」

「そうね」

「お〜！」

「う、うん」

「分かった」

こうして、なんやかんやでパーティーを組むことになった俺は、『炎狼の牙』の面々と共に、下へと続く階段を下りるのであった。

「……あれか」

階段を下りた先に見えてきたのは、開放された大きくて重厚感のある扉だった。

その両脇には、鎧姿の見張りらしき男性が二人いる。

「ん、雰囲気があるなあ……」

侯爵家にいた頃、俺は大量にタイムしたスライムたちと視覚を共有して、屋敷の外の様子を何年も見ていたので、ここにどんな扉があるのか知ってはいた。

しかし、いざこうやってこの目でダンジョンの入り口を見てみると、なんとも言えない威圧感のよなものを感じる。

大きな怪物が、口を開けて待っているような……そんな感じだ。

「なあ、ダンジョン内で変わったことはないか？」

ゲイリックさんが一歩前に出ると、見張りの男性に気さくに声をかける。

見張りの男性は「ふむ……」と考えるような仕草をしたあと、口を開いた。

「昨日の夕方頃だったかな。第七階層で中規模のスタンピードが起き、多数の死者が出たらしい。まだ不安定かもしれないから、そこへ行くのであれば気をつけた方がいい」

「おう、そうか。ありがとな！」

丁寧に教えてくれた男性に、ゲイリックさんは感謝の言葉を述べた。

ちなみにスタンピードって言うのは、魔物が大量発生することを指す。

中規模となると、大体百匹ぐらいたらうか？

なるほど。ダンジョンの状態か……それは盲点だったかも。

平時のダンジョンなら大丈夫だが、稀に起こる異常事態には、今の俺では対処の難しいものもある。

ダンジョン内では、空間魔法の【空間転移】を使うのに必要な魔力量も多くなり、さらに階層を跨ぐ転移ができない。

【空間転移】は【転移座標記録】という魔法で記録した座標の場所に、一瞬で転移できる魔法だ。

普段であれば、もし何かあった時は【空間転移】で逃げればいいが、魔力量が少ない俺は、ダンジョンで思うように【空間転移】が使えない可能性がある。

そんなことを思ってたら、ゲイリックさんが俺たちの方へと向き直り、口を開く。

「これから潜るぞ。先頭はルイ。その後ろに俺とシン。最後尾がニーナとアルトだ。それじゃ、行くぞ」

そうして、俺たちは言われた通りの隊列を組むと、ダンジョンの中へ足を踏み入れるのであった。

「……ここがダンジョンか」

ボンリと、誰にも聞こえない声で俺は呟く。

世界最大級の広さを誇り、今だ底が解明していないシュレインのダンジョン——その第一階層はパツと見、普通の洞窟だ。

道幅は七メートルほどで、高さは五メートルほど。

左右にある壁の高いところには、国が設置した持続性重視の魔石灯が等間隔で設置されているの

が見える。

魔石は魔物から採れる物質で、魔石灯は魔石の魔力をエネルギーにして明かりを灯すことができるものだ。

明かりは第三十階層まで取り付けられており、これのおかげで探索者の死亡率は大きく減少したのだ。

ただし、第三十階層よりも深い階層は、危険すぎるという理由で取り付けることができない。

まあ、普通に攻略するだけでも命懸けの場所だし、仕方ないな。

そんなことを思いながらも、注意深く探索していると、ずっとリュックサックの中で寛いでいたスライムで俺の相棒のネムがひよこつと顔を覗かせた。

そして、俺の肩に乗っかってくる。

「きゅきゅ？」

「ああ、お目覚めかな？　ここはダンジョンだよ」

そう言っつて、俺はネムを優しく撫でる。

すると、ネムは心地よさそうに体を震わせた。

うん。可愛い。

そうしてダンジョン探索中であるというのに癒されていると、横を歩くゲイリックさんから声をかけられた。

「何か心配するな〜と思ってたけど、やっぱり従魔だったか。にしても、よく懐いているなあ」

「まあ、この子との付き合いは結構長いから」
ざっと四年。厳しい実家生活を支えてくれた、俺の最初にして最高の仲間だ。

もう相思相愛（？）と言っても過言ではないな！

「え？ 従魔？」

「あ、剣士が本業でテイマーはサブって感じ？」

ニーナさんとアルトさんはネムの存在に気づいていなかったようで、不思議そうに問いかけてくる。

「ああ。俺は《タイム》の祝福ベネディクトを持っているんだけど、従魔はサポートみたいな感じで、普通に剣主体で戦うよ」

俺は、あくまでも剣士であることを主張する。

俺の《タイム》と、スライムを使った戦闘方法は少し特殊だから、できれば隠しておきたいんだよね。

それに剣だけでも、Dランク冒険者を名乗るに値するぐらいの実力は持っているわけだし。

そんなことを思っていると、先頭ですつと黙だまっていたルイさんが口を開いた。

「前方の右の穴から魔物の気配。数は六。気配からして、全員ゴブリン。ただし、一匹強い……ゴブリンソルジャーがいる」

その言葉を聞き、俺たちは瞬時に気を引き締める。

ゴブリンが相手とはいえ、油断をするべきではない。

そんなことを思っていたら、右の穴からぞろぞろとゴブリンが姿を現した。

五匹は、棍棒こんぼうを持ったゴブリン。

だが、最後の一匹は鉄の剣を持ち、おまけに革の防具を身に着けている。

「来たか……よし。シン君、ちよつとやってこい。実力を見せてくれ」

ゲイリックさんが言う。

なるほど。第一階層で出てくるようなそこまで強くない魔物を使って、俺の実力を確かめてもらうってことか。

こいつら相手に五人で挑むのは、過剰戦力もいいところだし、それよりも背後からの奇襲とかに気をつけるべきだよな。

そう思うと、俺はガヌスさんからもらった剣を抜く。

そして、地を蹴った。

「はあっ！」

先手必勝。

俺は瞬時に距離をつめると――「閃ひび」。

新しい剣を横なぎに振った。

それだけで、ゴブリンの首二つが宙を舞う。

「ギヤギヤギヤ……！！」

「ギヤア!!」

「ギャー！」

「ギャギャギャー……！！」

残る四匹が、激昂しながら武器を振り上げて襲い掛かってくるが、自分の周囲のことを把握することができず空間魔法——【空間把握】を駆使して、適切な間合い管理を行う。

それにより攻撃を華麗に躲し、逆に奴らが攻撃したことで生まれた隙を突いて、討伐する。

そうして、ものの十秒足らずで、残るのはゴブリンソルジャーのみとなった。

「グギャギャギャー！！！！」

鉄の剣を振り上げ、突進してくるゴブリンソルジャー。

その攻撃を、俺は魔鋼の剣で受け流すと、すれ違いざまに腕を振るい、奴の首を斬り落とした。

こうして危なげなく、俺はダンジョン探索における初戦を終えるのであった。

バサ——

直後、倒れた魔物が全員音を立てて、塵となり、消えてしまった。

残ったのは魔石だけ。

これはダンジョンでのみ起こる現象で、魔物だけでなく人間の遺体もそのまま放置していると消えてしまう。ダンジョンの不思議な力で魔力や体の組織が吸収されるのが原因と言われているが、詳しい仕組みはよく分からない。

ふと剣を見てみても、血は一切ついていない。血も全部塵となってしまったのだろう。

血を拭う手間が省けて楽だな。

そんなことを思っていると、後ろにいた『炎狼の牙』の面々が歩み寄ってきた。

「ほ、なかなか見事なもんだな。急所を的確に斬るって、言うのは簡単だが、やるのは結構難しいんだぞ？」

ゲイリックさんが口を開く。

「へ、やるじゃない。驚いたわ」

「凄いなあ。や、驚いたぜ」

「……うん。凄い」

ゲイリックさんに続いて、後ろの三人も口々にそう言った。

こうして、面と向かって褒められると、照れくさいな……

俺は思わず視線を下に向けると、後ろ髪の毛の辺りを軽く掻いた。

「さて、おかげでシン君の実力がどんなもんか分かったよ。それで、シン君って連携苦手だろ？」

「……はえ？」

ゲイリックさんの指摘が凶星だったこともあり、思わず呆けた声を出す。

そんな俺に、ゲイリックさんは「年相応の声も出せるんだなあ」と笑いながら言葉を続けた。

「いやー、俺は人を視るのが得意だからな。あれは連携というものが眼中にすらない奴が取る動きだ……もしかして、さつき仲間がいるって言ったの……嘘か？」

「……確かにそれは、さつきと行かせてもらいたくないな」と思って、咄嗟に吐いた嘘だ……」

まさかさつききの戦闘だけで、そこまで暴かれるだなんて思いもしなかった。

それは素直に称賛しながら、俺は気まずい顔をする。

「あゝ、やっぱりな〜」

「まゝ、ソロで潜るとか、流石に言えんよな」

「どこまで行くのかによりますが、一人では厳しいと思いますよ……」
「うん。まあ、気持ちは分かるから……」

だが、嘘を吐かれていたことに対して、『炎狼の牙』のメンバーは存外気にしていないようで、責めるようなことは言われなかった。

そのことに内心安堵しながら、俺は地面に転がっている六つの魔石をリュックサックの中に放り込む。

「よし。先へ行くか！」

そしてゲイリックさんの言葉で、再び俺たちは先へと向かって歩き始めた。

「はあっ！」

ゲイリックさんが斧を横なぎに振り、スケルトンの集団を殲滅する。
スケルトンは骸骨みたいな見た目の魔物だ。

【魔力よ。爆ぜよ、爆ぜよ、爆ぜよ】ー」

ニーナさんは魔法の詠唱を唱える。

そして、ゲイリックさんの間合いの外にいた残りのスケルトンを、魔力の弾丸を炸裂させる無属

性魔法——【マジックバレット】を連射して仕留める。

そうして、あつという間に戦いが片づいた。

……ちゃんと威力のある魔法を使えるのって、いいよね。

ろくな攻撃魔法を持たない俺は、内心ニーナさんに嫉妬しつつも、先へ進んだ。

スケルトンの魔石は、拾ったところで大した値段で売れないということで、スルーする。
持てる量には、制限があるからね。

肉体に比べると吸収されるまでの時間は長いものの、魔石もしばらく放っておくとダンジョンに吸収され、その魔石をもとにまた新しい魔物が生み出されるんだとか。

更に進んで行くと、やがて開けた場所に出た。

小学校の体育館ほどはある大きさで、いくつかの分かれ道があり、数人の冒険者がいた。

「ようやく着いたか……」

俺は呟く。

ダンジョンに入ってから約一時間。

ついに、第二階層の入り口に到着したのだ。

「さてと。あそこから下りれば、第二階層だが……どうする？ 休むか？ それとも帰るか？」

「大丈夫。進んでいいよ」

そう聞いてきたゲイリックさんに、俺はすぐに言葉を返した。

「よし。このまま第三階層にある休息地点まで、一気に進むぞ！」

ゲイリックさんの言葉に、俺と『炎狼の牙』の面々は無言でコクリと頷いた。そして、そのまま真つすぐ歩き、第二階層へと続く下り坂に入る。

「……ここが第二階層か」

坂を下り切った俺は、第二階層に足を踏み入れた。

ん……なんとというか、第一階層と雰囲気がちよつと違うね。なんか、少しだけけど空気が重い感じがする。

第二階層になると、Dランクの魔物——オークやスケルトンウオーリアーなんかが出てくるようになるため、スライムなし仲間なし魔法なしの俺だったら、この時点で相当手こずるだろう。

もつとも、今日は今のところスライムなしだが、代わりに仲間がいるので、問題ない。

……臨時で組んだパーティーのメンバーを、仲間と呼ぶかどうかは賛否両論あるだろうが。

「きゅー」

あ、ネムが『かまつてよ』と言っている。

だが、すまん。流石にダンジョン探索中に——それも『炎狼の牙』のメンバーの前で、呑気なことはできないんだ。

お詫びとばかりに一回だけ撫でてやると、ネムはいじけたように「きゅー」と縮こまる。

そんなネムに内心癒されていると、「前方右穴からオーク。数は十五」というルイさんの声が聞

こえてきた。

今更だが、ルイさんの祝福は感知系なんじゃないかと思う。

すると、前方から棍棒を持ったオークがぞろぞろと姿を現した。

【魔力よ。爆ぜよ、爆ぜよ！】

「はあっ！」

出会いがしらにニーナさんとアルトさんは、それぞれ魔法と矢をお見舞いする。

それにより、オークの集団は動きを止めた。

ニーナさんが更に強力な攻撃魔法を放ち、敵の集団全体に満遍なくダメージを与える。

その隙に、俺はゲイリックさんと同時に突撃する。

「はあっ！」

「おらあ！」

ゲイリックさんが合わせてくれるおかげで、動きやすい。

俺は自分の実力を思う存分に発揮しながら——だけどなるべくゲイリックさんも気にしつつ、オークの群れを掃討していく。

こうして、十五匹いたオークの群れは、あつという間に全滅した。

その後も、次々とダンジョンが生み出した魔物が襲ってくる——が、特に苦戦することなく撃破していく。

そうして進んでいき、事前知識からして、第二階層もそろそろ終わりかなーと思いはじめていた時

だった。

「……お、あれは——」

辺りを見回しながら進んでいたゲイリックさんが突然立ち止まったかと思えば、小走りで壁際へと向かって行った。

どうしたんだ……と不思議に思いつつも、他の『炎狼の牙』の面々と共にゲイリックさんのあとについて行ってみる。

「見る！ 迷宮紅水晶だ」

ゲイリックさんは駆け寄ってきた俺たちの方に向き直ると、自分の足を指差す。

言われた通り、指が差し示す先を見てみると——そこには窪みに隠れるようにして、血のように赤い水晶すいしやうが三つ、単結晶の状態たいたいで岩肌から突き出していた。

「へえ……これが迷宮紅水晶なのか……」

俺は三つの迷宮紅水晶を興味深く見る。

迷宮紅水晶とは、迷宮鉱石メイスイ・オアというダンジョンでしか見られない鉱物の一種で、美しい赤色をした水晶だ。そして、そうホイホイ見つけられるようなものではない。

第十階層まで潜って、一つも見つけられないことの方が多いと、小耳に挟んだことがある。

それで、肝心の買取価格だが……まあ、大きさにもよるが、ここにある長さ二十センチほどのやつなら、一つあたり銀貨四枚といったところだ。

つまり、三つなら銀貨十二枚。プルトで言えば十二万プルト。なかなかの収入になる。

迷宮紅水晶は、魔道具の材料になるから、需要は結構あるんだよね。

すると、ゲイリックさんが俺に視線を向け、口を開いた。

「よし。シン君。ツルハシは持つてるか？」

「いや、持ってない」

ゲイリックさんの問いに、俺は困り顔で答える。

そう。今回はダンジョンに慣れることを目的に来たのだ。

故に、そういったものは持ってきていない。

事前情報からも、まさか一回目の探索で迷宮紅水晶などの迷宮鉱石を見つげられるとは、思っていなかったのだ。

リュックサックの中はいっぱいだし、亜空間にアイテムを収納できる空間魔法——【空間収納】スペースホウマツ

も探索で手に入るであろう魔石を入れれば、すぐに容量が限界になると踏んでたんだよね。

……ん？ そういやなんでゲイリックさんは俺にツルハシを持っているのか聞いたんだ？

三つだけなら自分たちですぐ採掘できるし、経験豊富な彼らは、ツルハシぐらい持っているだろう。

この状況で俺に聞く意味なんてないはずだが……と疑問に思っていると、ゲイリックさんが口を開いた。

「なら、これを持って。試しに一つ採掘してみる」

そう言うって、ゲイリックさんは背中のリュックサックからツルハシを取り出して、俺の前に差し

出した。

なるほど。どうやらゲイリックさんは、俺に迷宮紅水晶メイスイレッドクリスタルの採掘をやらせてくれるようだ。

「いいのか？ これ、失敗したらマズいって聞くんだけど……」

ツルハシを受け取った俺は、不安げに迷宮紅水晶メイスイレッドクリスタルを指差す。

迷宮紅水晶はかなり脆いもろという特徴があり、やり方をミスれば木こっ端微塵ほみじに砕け散る——って聞いたことがあるのだが……

あれ？ 違ったっけ？ ……と思わず首を傾げる。

どうやらそれは間違いではなかったようで、ゲイリックさんは「その通りだ」と頷いた。

「じゃあ、なんで初心者の俺にやらせるんだ？ 結構な金がバーになる可能性だつてあるのに……」

「ん？ まあ、そりゃそうだが、今回の探索、シン君のおかげで結構順調なんだ。その見返りとも思ってくれ」

そうやって、おどけてみせるゲイリックさんを、他の『炎狼の牙』の面々は、『やっぱりお人好しだなあ。この人』と、温かい目で見ていた。

「分かった。やってみるか……」

幸いなことに、迷宮紅水晶メイスイレッドクリスタルの採掘方法は元実家の書庫にあった本に書かれていたので、割と鮮明に覚えている。

「確か、この辺だったかな……」

俺は本で得た知識を参考に、ツルハシを振り下ろすべき場所を正確に確認していく。

……よし。この大きさなら、根元の……大体この位置だったな。

あとはいい感じに振り下ろせば、綺麗に採掘できる。

そう思い、ツルハシを振り上げた——直後、ゲイリックさんから待ったがかかった。

「やろうとしているとこ止めてわりい。だが、このまま失敗すると分かかって、やらせるのはあれだからな」

「失敗する……？ 割と教本通りの動きだと思っただけ……」

どこか記憶違いがあったのか？ と思い、記憶を再び呼び起こそうとしていると、ゲイリックさんが首を横に振った。

「いや、ちゃんと学んでいる奴の動きだった。だが——それだとダメだ。ちょっと教本通りすぎたな。臨機応変に、だ。ほれ、ちょっと教えてやる」

そうやって、ゲイリックさんは膝をつくと、ツルハシを持つ俺の手を、背後から優しく握りしめた。

突然のことに目を見開くが——すぐに冷静になると、次の言葉を待つ。

「まず、今回の迷宮紅水晶メイスイレッドクリスタルは、下方向に斜めに突き出している。だから、ツルハシを当てる位置は——ここだ」

ゲイリックさんはツルハシを掴む俺の手を動かして、小さくコンコンと迷宮紅水晶メイスイレッドクリスタルのある一点を突く。

「あと、シン君の場合はちと手に力が入りすぎてるな。もうちょっと弱くていい」

そう言いながら、ツルハシを振り上げ——そして振り下ろした。
パキッ——

直後、迷宮紅水晶が綺麗に根元から折れ、俺の左手にパタンと倒れた。

「ほら、こんな感じだ。つーわけで、残りもやってみるがいい。あ、流石にシン君が持つていいのは一つだけだからな」

そう言つて、大仰に笑うゲイリックさんを背に、俺は笑みを浮かべるのであった。

迷宮紅水晶を採掘した俺たちは、それから程なくして第三階層に入った。

そして、第三階層に入ってから少し歩いた場所にある休息地点で昼食を取りつつ休憩する。

休息地点とはダンジョン内に所々にある、やや大きめの空間のことで、ここでは魔物が発生しないのだ。

何故休息地点に魔物が発生しないのかという課題は、度々グラフィア王国王立学園の論文で取り上げられるが、結局詳しいことは分からないらしい。

今のところ有力な説は、魔力が希薄な場所だから……というもののだが、休息地点以外の魔力が希薄な場所でも、数は少ないものの魔物が発生していることから、結局有力候補に留まっている。

とまあそんな話はさて置き、手短に休息を取つた俺たちは、更に先へと進んだ。

道中襲い掛かつてくる魔物は、オークや体長一メートルほどの巨大蟻——メイズアントといった、第二階層で出現した魔物と大して変わらなかったため、対処は容易だった。

そうして、気がついた時には第八階層に到達していた。

第七階層でスタンピードが起きたと聞いていたが、トラブルもなく無事に通過することができた。

「前方右穴から魔物の気配。数は六。気配からして、メイズアント。後方左穴からは……六のオーク」

「了解。俺とニーナは前。シン君とアルトは後ろ。ルイは遊撃を」

ルイさんの警告と、ゲイリックさんの指示が、続けてダンジョン内に響き渡る。

直後、俺たちは即座に動いた。

「はあっ！」

後方を任された俺は飛び出すと、横の道から出てきた先頭のオークの腹を斬り裂く。直後、何本もの矢が背後から飛んできて、一匹のオークが絶命した。

「ブフォオオオ！」

残りのオークの内、一匹が声を上げる。

「はっ！ はっ！ はっ！」

その後、俺は小さい体を存分に生かして相手の攻撃を躲しつつ、足や腕を攻撃して、移動と攻撃の手段を確実に奪う。

そうして倒しやすくしてから、相手の懐に入つて首を斬り裂いた。

背後から、「あゝ、やっぱ俺いらなくね？」とアルトさんの聞こえてきたが、心の中で謝つて

おく。

すまん。流石にこんな短期間で連携ができるようにはならないんだよ……

俺とスライムだけで戦うことを前提とした訓練を何年もやって来たが故に、この動きが体に染みついてしまっているんだ。

まあ、一人じゃきつそうな魔物が出てきたら、何がなんでも連携を取る必要が出てきそうだが……今は考えなくていいか。

そうして、俺は考え事をする余裕を残して、オークの集団を全滅させた。

「ん、ここに来て、また成長した感じがするな」

俺は呟く。

ダンジョンでは接敵する頻度が高いことが原因だろうか。

これだけ戦っていれば、それぞれの魔物の動きの特徴とか、リーチとかがなんとなく分かってくる……ような気がする。

そう。あくまで気がするだけなのだ。

こういうことは余程成長しない限りは、はつきりと自覚できないからね。

ふと後ろを見てみると、そこには塵が——どうやら前方からやってきた、メイズアントは既に全滅していたようだ。

相変わらず仕事が早い。

その後、俺はメイズアントの魔石を【スレンヤボツタ空間収納】で亜空間の中に放り込むと、『炎狼の牙』の

面々のところへ戻った。

そして、すぐに先へと向かって歩き出すのであった。

「……着いたか」

更に歩き、第九階層に入ったところで、再び休息地点セフテイラインに到着した。そこには俺たち以外にもいくつかの冒険者パーティーがいて、何かの準備をしていた。

「よし。今日はここで寝るとするか。ひとまず場所を取って、夕食にするとしよう」

ああ、もうそんな時間なのか。

ダンジョンの中だと、昼夜の感覚が分からなくなると聞いていたが、本当にそうだな。

この世界だと、腕時計とかスマホみたいな便利アイテムがないから、ダンジョン内で時刻を知る手段はないんだよね。

宿とかに置いてある壁掛け式の時計は、ダンジョン内に入ったらバグって機能しなくなるって言うし。

ところで、ゲイリックさんはもう夕飯の時間だと言っているが、実際はどうなのだろうか。

俺は今の時刻を知るべく、シュレインの時計台が見える位置に配置してあるスライムと視覚を共有した。

すると、時計の針は午後六時十分を指していた。

見事に日が沈んだあとだよ。

なるほど。これが経験による感覚ってやつか。

俺はゲイリックさんに感心しつつも、皆と共に休める場所を取って、夕食を食べることにした。「……ふう」

その場に腰を下ろした俺は、【空間収納】^{スプレイングポケット}から保存食である干し肉を取り出すと、もぐもぐと食べ進める。

美味しいかと聞かれると、微妙と答えざるを得ない味だが、これくらいは我慢するしかないだろう。

スライムに地上で出来立てのご飯を持たせて、こっちに召喚することで温かい食事にありつくという荒業^{あらわざ}も考えたが、課題が多すぎるため、今のところは不可能だ。

「ん〜ところで、シン君って今までどんな感じで冒険者活動してきたの？」

「どんな感じ……？」

要領を得ないアルトさんの問いに、俺は怪訝^{けげん}な顔で首を傾げる。

だが、アルトさんは特に気にした様子もなく言葉が続けた。

「そ。君ぐらいの歳の子がDランクって言うんだから、興味が湧くじゃん。やつぱ」

「ああ、なるほど」

どうやら、純粹な好奇心から来る質問だったようだ。

確かに、前例はあるとはいえ、俺のような子供がDランクというのは稀な話。

どうやってそこまでのランクになったのか、気になるのも無理はない。

「まあ、そんな大したことはしてないよ。シュレインの森でゴブリンとかオークとかを狩り続けた」

「一人で？」

「そう」

流石に世界的に悪名高い中毒性のある植物——キルの葉の畑を発見したことや、それによって生じた凶暴な魔物数百匹を全滅させたとかは隠しておいた。

本当はそのことがジニアスさんに評価されて、ランクを上げてもらったんだけど、実力はなるべく隠しておきたいからね。

「祝福^{ギョフト}が《タイム》でありながら、あれほどの剣技を持っている凄え奴だ。ギルマスも認めるだろうよ」

「確かにそうね」

「なるほどなあ」

ゲイリックさんの言葉に、アルトさんとニーナさんは同調するように頷いた。

うん。九歳らしからぬ剣技は、前世で六年間剣道をやっていただけのと、剣道で身に着けた感覚を活かしながら、自分なりにこの世界でひたすら剣術の鍛錬したから。

祝福^{ギョフト}の階級には、どうやって胡坐^{まご}をかけないからな。

いや、祝福^{ギョフト}は絶妙にバグっててチートな部分もあるから、そのおかげでDランクになれたのは否めない。一概には言えないか。

そんな感じで俺たちは、そのあとも取り留めもない雑談をしながら、食事をするのであった。

食事を終えた俺たちは、さっさと寝る準備に移った。

「おし。アルト。結界石を出してくれ」

「おうよ」

ゲイリックさんの言葉に、軽い感じで頷いたアルトさんは、自身のリュックサックの中をガサゴソと漁る。そして、四つの白い石を取り出した。

「へえ。結界石か……」

俺はアルトさんが俺たちを囲うように置いている石を、まじまじと見つめた。

拳大ほどの白い半透明な石、結界石はその名の通り、物理的な防壁——結界を展開する魔道具だ。基本的に四角形の四隅に配置し、魔力を流すことで使用できる。

持続時間は込めた魔力や結界石の質によって異なるが、今回なら一晩は十分持たせられるだろう。

何故、魔物が出現しない休息地点セイレインでそれを使うのか——それは、迷賊めいぞくというダンジョン内で冒険者を襲う盗賊がいるせいだ。

迷賊は、就寝中の冒険者を襲うため、見張りは必須——そして、欲を言えば結界石のような魔道具も欲しい……といった感じだ。

そんな便利道具である結界石だが……地味に高い。確か、一つで五十万プルトはした気がする。まあ、俺にはスライム最高の相棒がいるから、見張りは間に合ってるんだけどね。

そう思いながらも、「羨ましいいな〜」と羨望の眼差しを送りつつ、俺はリュックサックから革のシートを取り出して、地面に広げた。

「よし。寝床完成っ」と

そう。これが寝床だ。普通にこの上に寝転がって、あとはリュックサックを枕替わりにする……それだけだ。なかなか野性的だが、持っていけるものが限られているダンジョン攻略において、わざわざテントなんてものを持つてくる奴はそういない。持つてくるのは、せいぜい高位の空間属性魔法師ぐらいだ。

それに、こうした方が方が一の時の対処もしやすい。なんだかんだこれも、ちゃんと考えられているのだ。

「さてと。そんなじゃ、もう寝るか。それで、見張りは……ニーナ、アルト、俺、ルイ、シン君の順番でやるとしよう」

ゲイリックさんの提案に、俺たちは異論なしとばかりに無言で頷く。

それにしても、ゲイリックさん。本当に優しい性格なんだな。

体力的な面を考慮して、子供と女性の俺とニーナさんを睡眠が分割されない最初と最後に置き、自身は負担の大きい真ん中を選択する。

ここまで他人のことを考えられる冒険者は、なかなかいないだろう。

そして、そんな彼だからこそ、三人も信頼して、ついて行っている。そんな感じがした。

「さて。子供は早く寝るんだな。シン君」